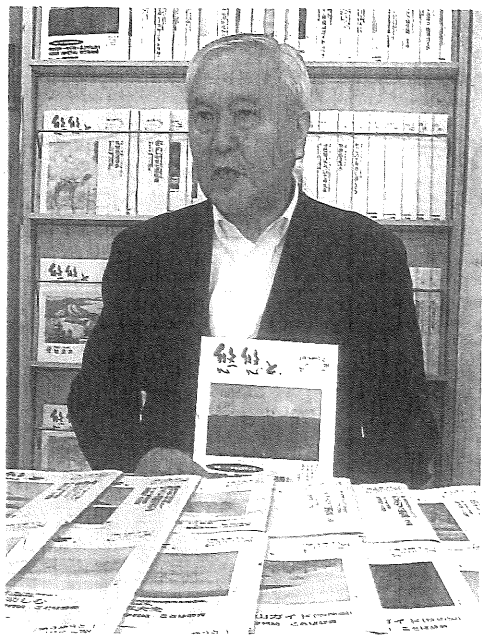


シニアの情報満載 100号

隔月刊「悠悠と。」企画・取材・執筆、ほぼ1人

道内で発行されている高齢者向けの生活情報誌「悠悠と。」が今月、通算100号に達した。編集長一人で取材・執筆・編集をこなす隔月刊。雑誌の読者離れが進む中、「シニアには気楽にパラパラとめくれるメディアが必要」との思いで発行を続ける。

「悠悠と。」は1999年12月創刊。A B判44ページで、高齢者とその家族の視線を重視した健康、医療、防犯などの情報が盛りだくさんだ。書店では取り扱っていないが、定期購読者や道内各地の病院や薬局、高齢者施設に販売。1冊160円(税込み)で、現在の発行部数は約3万部だ。



100号の記念号を手話す真鍋編集長
札幌市中央区の出版社「エヴァナム」

編集長の真鍋康利さん

66)札幌市西区は企画立案・取材・執筆をほぼ一人で手がける。作家、経営者、女優らにインタビューする「百期百会」は創刊号から的人气連載で、2004年には「ひびの墜下」故・三笠宮寛仁親王にも登場してもらった。

発行のきっかけは、友人の母親が右足を折る大げが

札幌の真鍋さん(66)「啓発が大切」奮起

を負ったことだ。車いすが必要になったが、入手方法がなかなかわからない。「高齢化が進んでいるのに高齢者への情報提供が足りない」と実感した。

自動車関連会社をリストラされたこともあり、99年に出版社「エヴァナム」を設立し、「悠悠と。」を創刊。行間を広く取り、文字を大きくする一方、専門用語やカタカナを極力使わないよう心がけた。

冬道での転倒や振り込み詐欺、地震などへの対策は何度も特集している。「誰

もが高齢になる。「まだ大丈夫」と思っている人も、いずれ大丈夫じゃなくなる。同じ人が読んでいるとは限らないから、啓発を繰り返すことが大切」。購読した人の子どもや孫が高齢者になった時に役立ててもらうのも狙いだ。

部数とともに真鍋さんも年を重ねた。最近地下鉄で初めて優先席に座り、気づいた。「自分が高齢者になったからこそ書けることもあるはず」と。

100号は創刊以来の歩みについて、同誌に携わってきた人々からの寄稿で特集を組んだ。問い合わせは「エヴァナム」(011・522・2710)へ。

廃刊やネット展開でこぼれ落ちる高齢者

高齢者向けの雑誌やフリーペーパーを取り巻く状況は厳しい。

札幌の文芸愛好家グループが68年に創刊した文芸雑誌「こころの花」は06年に廃刊。道内で99年から発行されてきた月刊フリーペーパー「加齢を愉しむ生活

発見新聞『アラタ』も04年に廃刊となり、11年に出版社「ノースムーン」が創刊した無料誌「わらふく」も2年で発行が終わった。

「こころの花」は編集者らの高齢化が理由。「わらふく」の場合は、女性向け

に内容を変更するのに伴って廃刊された。雑誌の出版元は読者離れが進むことで、より専門的な内容に移行したり、紙での発行をやめてインターネットでの展開を進めたりする。その過程で、ネットへの依存率が高くない高齢者がこぼれ落ちていく傾向にある。

真鍋さんは「悠悠と。」を続け、そうした高齢者をつなぎとめたいと考えている。気楽に手にとりやすい雑誌のニーズは少なくないとし、「私のような意地張りの個人が支えていかないといけない」と話す。(天山稜)